なんか転生した

野山の詩人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんか転生した

【Nコード】

N8130Y

【作者名】

野山の詩人

【あらすじ】

ある日、地味で目立たないごく普通高校2年生の今城 幸一は信号無視の暴走トラックにはねられ死亡した……………はずだったが異世界にて赤ん坊として生まれ変わっていた。そんな少年のなんか転生したお話。剣と魔法の世界で主人公最強(?)のテンプレ転生小説です。今更感が否めないオードックスなものになる予定です。で、暇な時間にスナック感覚で見てもらえたら嬉しいです！

なんかプロローグみたいなもの(前書き)

処女作になります。よろしくお願いします。

なんかプロローグみたいなもの

『異世界』

読んで字のごとく、異なる世界のことである。

『転生』

これまた読んで字のごとく、別の存在へ転じて生まれることである。

これらを合わせると『異世界転生』という言葉になる。

つまり異なる世界に精神だけを持ちながら生まれてくるということだ。

冒頭からなぜこのようなことを語っているかというと、ご察しの通り、俺が実際に体験してしまったからである。

俺が死んだのは高校2年生だ。

死因は事故。信号無視をした暴走トラックにはねられ、そのまま帰らぬ人に。

享年17歳、地味で目立たない人畜無害な少年でした。と自分で説明しながら絶命。

誰に？ 知らんがな。

そして転生、しかも異世界。

ずいぶんとあっさりした転生で、目が覚めたら赤ん坊になっているってやつだ。

もうちよっとアクションがあってもいいんじゃないか？ 軽いノリの女神さまとあってチート能力を貰うとかさ。

しかもなんだよ、家族が小汚い小さな小屋に住んでるばあさん一人
つて……。普通貴族とかの家庭に生まれてくるもんじゃないのか？
不満は大量にあるが、転生してしまったものは仕方がない。魔法と
かあるみたいだし、治安も悪いみたいだから保身のために最低限頑
張ることにする。

というわけで、これから俺のつまらない転生後の話をはじめようと
思う。

書き出しは、そうだな……。

俺、なんか転生した。

なんかブローグみたいなもの（後書き）

誤字・脱字がありましたらコメントください。
間違った文章表現など指摘していただけたら嬉しいです。

第一話 なんか俺と小屋とばあさんだった(前書き)

少しまとめて投稿します。

第一話　なんか俺と小屋とばあさんだった

転生して初めのうちはものすごく混乱した。

生きている喜びと、この不思議な現象への不安で、恥ずかしながら泣きわめいてしまった。

もちろん転生する前の俺ならば、こんなことで泣きはしなかっただろうが、今は0歳児の赤ん坊なので感情を制御することができなかつたのである。

「お〜、よしよし。いい子だから泣かないでくれ」

俺が泣いていると、すぐにこの小屋に住むばあさんが近寄ってきて、俺をあやしてくれる。

この小汚い小さな小屋にはばあさんと俺しかいないことから、俺は孤児ではあさんが引き取つたのだろうと勝手に判断した。

もしかしたら、この今にも倒れそうなヨボヨボばあさんが頑張つたという可能性も……ないか。

転生から2年が経ち、俺も精神が安定してきた。

ちなみにこの小屋は、窓から見た感じ鬱蒼と茂る森の中にあるみたいだ。日々の消耗品はばあさんが町で買ってきているらしい。

ばあさんは、あんな失礼なことを頭で考えていた俺を、必死で育ててくれた。

前世では親に甘えることのできなかつた俺にとって、血がつながっていなかつたけど親のような存在になつた。

そして心が落ち着いた俺は、この世界についての情報を集め始めた。『この世界』は俺が前世にいた世界とは別の、異世界というものだった。

なぜ異世界だとわかったかというところ、ばあさんが家事をする際に魔法を使っていたからである。Oh！ふぁんたじい。

それに部屋も現代の建築技術では考えられないほど雑であり、ばあさんの顔もほりが深く、ヨーロッパ系の容姿をしていた。間違っても日本じゃない。魔法があるから外国でもない。

嗚呼……異世界か。

そう思った時、俺は意外と冷静だった。まあ、今までいろいろありすぎて脳がマヒしていたせいなのかもしれないが、とりあえずこの現実をすんなり受け止めた。

そして異世界だと驚くよりも先に、どうやって生きていこうかと思っただ。

ばあさんにいつまでも頼るわけにはいかない。この世界で生きていくためには、情報をできるだけ集めなければならない。

「おばあちゃん」

「ん、なんだい？ コウイチ」

コウイチとは俺のことで、俺の名前は今城 幸一。なぜか前世と同じ名前だ。

俺はばあさんこと、アデーレ・ベインに請う。

「せかいをおしえて」

「世界を教える？」

「うん、ぜんぶね。あと、まほーもおしえて！」

本当は世界についての一般常識と、生活していくための魔法や保身のための魔法を教えてほしいと言いたかったのだが、なぜか口に出そうとすると2歳児の話し方になって意味がわからなくなる。

これじゃあ伝わらないと思ったが、アデーレばあさんの返答は予想外のものだった。

「そうか。そろそろ意識が安定してきたようじゃのう。前世の記憶も覚えているのかえ？」

ん？ あれ？ 今何ていったこの人。

俺があんぐりと口をあけて驚いている姿がおもしろかったのか、ホッポと笑いながら続ける。

「そう驚くでない。コウイチを転生させたのは紛れもないこのワシなんじゃからのう」

あー。親のような存在になっただって撤回ね、うん。

「なんで、だまってたの？」

俺は怒ってアデーレばあさんに詰め寄る。もっとも傍から見れば祖母に駄々こねている孫にしか見えない。

「転生術は初めてだったからのう。成功しているかわからなかったから、この世界について質問されるまでは黙っておこうと思ったん

「じゃ

勘弁してくれ……。じゃあ俺が転生したのはアデーレばあさんのせいだったのかよ！

そしてそこで一つ疑問が生まれる。

「ぼくと、ぼくになるまえのぼくは、てんせーのせいではなくなったの？」

あーもう！ この口調だと伝わらない！

イライラしていた俺に気付いたアデーレばあさんは、何かの魔法を唱える。

(念話ならどうじゃ？)

(おお！ すげえ！)

この世界にはこんな便利な魔法があるのか。是非とも覚えたいものだ。

(……ってか、こんな魔法あるんなら、話せるようになるのを待つ必要はなかったんじゃないか？)

(この魔法はお互いの魔力を消費するのう。幼すぎる相手には使えんのじゃ)

(なるほど……)

(で、コウイチは何を伝えたかったのかえ？)

(そうだった！ その転生魔法ってのはもともとある体にほかの世界からの精神を入れる魔法なのか？)

(そのとおりじゃ)

(だったら、そのせいで俺になる前のこの体の持ち主はどうなったんだ？ まさか殺したっていうんじゃないだろうな！)

そう、思いついた疑問とはそのことだった。

俺はトラックにひかれて死んだ。そのあと赤ん坊に転生した。じゃあ、赤ん坊の体の持ち主はどうなったのか。

もし自分のせいで死んでしまったのならばどう責任を取ればいいのか。

(そう心配するでない、その赤ん坊の持ち主はもうすでに死んでいたのじゃ。もともと転生の術は死んだ者同士しか使えないからのう。もっともしぬ瞬間がぴったりと同じでないといけないがの)

それを聞いて内心ほつとする。

(わかった。じゃあ最後にもう一つだけ聞いていいか？)

(ほつほつ、言ってみい)

(なんで俺を転生させたんだ？)

(それは……)

アデーレばあさんはそこで一呼吸置いて、続ける。

(神のお告げがあった。……とだけ言っておくかのう)

なんだよそれ、めっちゃ気になるじゃないか！ なに？ 焦らしプレイなの？ フラグたてたいの？

(それよりもコウイチよ、世界を教えろと言ったのう。よかるう、わしがこの世界についての知識と魔法をすべてお前に教えよう)

そういつてからまたホッホッと笑うアデーレばあさん。

神のお告げの話はきれいにそらされたが、保護されている身なので深く追求するのはよそう。

かくして、齡2歳の俺はこの日から座学と修行を受けることになった。

あ、俺まだ2歳じゃん!?

第一話 なんか俺と小屋とばあさんだった(後書き)

誤字・脱字がありましたらコメントください。

第二話　なんか保身って大切だよ

なんか8年たった。

俺は銀色の肩まで伸びた髪にガラス玉のような青い目、弱弱しい女のような容姿に華奢な体つきのおふぁんたじーなキャラクターに育ったとさ。

アデーレばあさん曰く、「両親にそっくりじゃのう」だそう。

ちなみに俺の両親は火事で死んでしまったらしい。

俺の両親は、この小屋から東にあるクーファという町に住んでいた。火事の原因は遊び半分の放火。その場にたまたま居合わせたアデーレばあさんが水の魔法を使い消火し、両親の腕の中で守られた虫の息の俺（の前の体の持ち主）を助けてくれたのだ。意外と元気だよ、アデーレばあさんって。

まあそれは置いて、8年で何があつたかまとめようと思つ。

まず俺はこの世界のある程度の知識を覚えてもらった。

ここは地球とは別の次元にある世界アルマータ。

この世界は現在の日本のような政治ではない。剣と魔法、つまり武力で国を治めていて、力なきものは奴隷や農民として貧しく、剣の腕や魔法が使えるものは騎士や貴族として豊かに暮らしているらし

い。

なぜかというところ、この世界には魔物というものが存在しているからだ。

魔物は自然にあふれているダスト（自然魔力ともいうらしい）から生まれてくる。もっとも急に街中で生まれてくるをけではなく、狭い洞窟や戦の跡地など、負の念が溜まりやすいところで生まれる。

魔物は好んで人間を襲う。なぜ人間を襲うのかはよく分からないが、魔物同士で殺し合うということはあまりないらしい。

つまり魔物は人間にとって天敵。そのため力あるものがこれを駆除しなければならぬ。よって必然的に力ある者の権力が高くなる。

権力の順序は、上から国の国王、国王に仕える貴族、貴族に雇われる騎士や魔法使い、国家が運営する冒険者ギルドに所属する冒険者物を買う商人、農業を営む農民、そして金で売買される奴隷といった感じらしい。

アルマータでは世界を分けるようにして3つの大国が存在していて、大地の国ウルズ、月の国ヴェルザンデイ、死の国スクルド、上から順に北・南西・南東の位置にある。その間に小国や村がたくさんあるわけだ。（ちなみにこの小屋は大地の国ウルズの北に位置している。）

そして、それぞれの国のトップは国王で政治のすべての権限を国王が握っている、いわゆる絶対王政ってやつだ。

まあ国の成り立ちやら、歴史やらはここでは割愛する。

重要なのは、この世界は力なきものは力あるものに従わなければならない弱肉強食の世界だということ。自分の身は自分で守る。地球

でいえば、少し違うが中世ヨーロッパあたりの時代に該当するだろう。

よってこの世界で生きていくためには、武術や魔法といった技を磨く必要がある。

「では、どれから教えようかのう。火の爆発魔法か？ それとも雷の電撃魔法か？」

「えっと……」

「ホツホツホ、遠慮せずとも、好きな魔法を述べるとよいぞえ」

ドサツと魔法の一覧が載った本を俺に投げる。

なんか正体がわかってからアデーレばあさんのテンションが無駄に高い……。 (ちなみにこのとき俺は5歳だ)

そして物騒な魔法を俺に教えようと意気込んでいる。

アデーレばあさんは元魔法使いだったからしい。なので剣術を教えることはできない。小屋にはアデーレおばさんと俺しかいないので、魔法を覚えるしかないのだ。

確かに生きていくためには必要なことなのかもしれない、が…。

正直言つて怖い。相手を傷つけるのも、自分が傷つくのも。

実際俺は痛いのも辛いのも嫌だ。俺はもともと地味で目立たない高校生で、喧嘩の中学校以来全くしてない。人を傷つけるのが嫌なチキン野郎だ。

そんな俺に人を殺す技を覚えるだって？ 無理に決まってるだろ。

そう悩みながらページをめくっていると、補助魔法というものが載っているページを見つけた。

「アデーレおばあさん」

ちなみに俺の話し方は子供っぽくしている。実際は普通に話せるようになったのだが、何となく年相応にしていたほうがいいような気がするので（容姿的にも）、思考とは違い幼い話し方になっている。

「お、ようやく決まったかい？ さあどんな魔法かえ？」

「ここに書いてある補助魔法全部」

「は？」

アデーレはあさんがきよとんとした顔でこちらを見てくる。

「だから！ ここに書いてある補助魔法全部教えて」

「いや、だつてのう……。補助魔法は剣士が肉体強化に使ったり、僧侶が回復に使ったりするもので、攻撃的要素はないんじゃないぞ？ それにここに書いてある全部を教えたら他の魔法はほとんど覚えられなくなるぞえ？」

そう、補助魔法とは肉体強化や回復など、主に援護に使われるもので攻撃的性質がない。ゆえに、その職に合わせて5・6個覚える程度の魔法である。

しかし俺が示した補助魔法の数は見た感じ100個以上。どんなに優れている魔法使いでも、種類によるがだいたい100〜120個の魔法を習得するのが限界である。

俺がもし魔法の才能があつたとしても、100個も補助魔法で埋めてしまえば、ほとんど他の魔法が覚えられなくなり、攻撃手段がなくなってしまう。

「ほ、本当にいいのかえ？」

「うん、僕はこれがいい」

ニコツとアデーレはあさんに笑いかける。我ながら名案だと思つたからだ。

人を傷つけない、自分が傷つきたくない。だったら保身じゃね？ という発想だ。

この世界で単独で行動している人間は少ない。騎士や魔法使いたちは軍隊を作っているし、冒険者はパーティーを組んだりしている。つまり、補助魔法しか使えなくても需要はあるはずだと踏んだのである。

ちなみに俺は将来何になるかは決めていない。なぜかという俺がこの世界に転生した理由がわからないからだ。アデーレはあさんに聞いてもすぐ話を逸らされるし。

まあ、神のお告げがどうたらこうたらいつていたので、何かしらの意味があるのだろう。とりあえず生きていくために魔法を覚えろとのことだった。

「まったく……お前は変わり者じゃのう。てつきりド派手攻撃呪文をほしがると思つとったんじゃが」

「ごめんねアデーレはあさん。僕はどうやら主人公体質じゃないみたいだから」

主に、第一に保身を考える思考の面で。

「主人公体質？ まあ、なんか知らんが、よかろう。」

どうやらアデーレはあさんは俺の元いた世界については詳しくないらしい。しかし言葉の意味はわからないが、ニュアンスは何となく伝わっているっぽい。

そして俺は5歳から10歳にかけてアデーレはあさんに魔法の修行を受けることになる。

第二話 なんか保身って大切だよね（後書き）

コメント待ってます！

第三話 なんか魔法を覚えた

5歳から5年間、俺はアデーレおばさんの厳しい修行を終えた。

え？ いくらなんでもはしよりすぎだろって？

……んじゃあ、少しだけ何をやったか説明。

まず俺はアデーレおばさんに魔法の原理について説明してもらった。

世界には大きく分けて5種類の魔法が存在する。五大魔法属性とい
うらしいが、それは火・水・土・風そして聖だ。昔は闇というもの
が存在したらしいが、今は大陸中で禁止魔法となっているため使う
ことは許されていない。

あとは水の派生の雷や回復魔法、補助魔法なども存在する。雷は雲
の中の水蒸気の摩擦によって起こるから、それで水の派生なのだろ
う。

そして使える属性の魔法は生まれた時から決まってる。ただし補助
魔法や回復魔法は、属性とはまた別で、こちらでも覚えられるか才能
による。そしてその種類はさらに細かく分類される。

それを聞いた瞬間俺は焦った。なぜなら俺に補助魔法の才能がない
かもしれないからだ。

しかし、アデーレおばさん曰く、俺には補助魔法の適性があるよう
なのでほっとした。（普通適性はわからないらしいが……アデーレ
おばさんって意外と大物？）

そして魔法を使うには魔法力と呪文の詠唱が必要となる。

魔法力とは、大気中にある『ダスト』と呼ばれる自然魔力を無意識に体へ取り込み、それが体内で自分専用の魔力と変換されたものだ。

しかし大気中にある『ダスト』つてのを使えばいくらでも魔法が使える、というわけではない。

ダストの体内への取り込みは無意識中に行われる。意図的にたくさん取り込めるといわけではない。それに経験によってダストをためておける量も変わる。

たとえば言うならばRPGのMPマジックパワーのようなものだと思ってもらってもいい。

そして呪文だが、呪文はその魔法を放つときに術の構成を手助けする役割がある。熟練した魔法使いは、無詠唱で魔法を発動することもできるが、そうそういないそうだ。

あと魔法は下位、中位、上位に分かれていて、下位の呪文は第一詠唱だけで発動するが、中位は第二詠唱、上位は第三詠唱まで唱える必要がある。それぞれ呪文が増えるたびに強くなっていく。

もちろん熟練した魔法使いは第三詠唱まで省略が可能だ。だがその第三詠唱を省略できる魔法使いは、両手の指で数えるほどしか存在しておらず、全員が二つ名持ちだそうだ。

二つ名か……。なんか中二つばいから欲しくないなと思う俺は、やはり主人公体質ではないのだろうか。

この世界では二つ名は非常に名誉ある称号で、国王か王族、もしくは最上級の位につく貴族からしかもらえないらしい。まあ、俺には関係のない話だ。

つてな感じで、簡単に魔法の説明するとこんな感じだ。

実際最初この話を聞いた俺はちんぷんかんぷんだった。
するとアデーレばあさんはホッホッホと笑い、「まあ実際に見たほう
が早かるう」と言っつて俺を森の奥へ連れ出した。

文明の香りが全くしない獣道を進んでいると、やがて数体の魔物が
現れた。

俺はこの時初めて魔物というものを見たのだが、本当にふぁんたず
いくな世界に転生したんだなと改めて思った。

だつて熊に羽が生えてるんだよ？ こんな魔物ゲームでも見たこと
ないよ。

魔物の名前は『フライアルクトス』。熊の数倍の腕力と鋭い爪で敵
を切り裂き、逃げまどうものを背中に生えた羽で追いつめるとい
うレベルでいうと中級の中位に値する魔物らしい。

おいおい、初の戦闘でこれはないだろアデーレばあさん……。
と思っつていると「見てなさい」と言っつてアデーレばあさんは羽熊に
向かつて対峙した。
フライアルクトス

いくらなんでもアデーレばあさん一人であの数を相手にするのは無
理だろうと思っつていたのだが……。

ギユウイイーーン

アデーレばあさんが口を開いたと思つと、いきなりレーザービーム
を放つた。

く、口からビーム……だと？ そのビームに当たつた羽熊たちは、
灰すら残らず消滅した。

魔物が消し飛んだ森の中で、ひと時の静寂が訪れる。

「さあ、やってごらん」

「できるかあああ!!」

アデーレばあさんついに人間やめたのか、と思った瞬間であった。

そのあとで聞いたことだが、あれは実際は杖などの媒介を利用して発射する火の派生魔法らしいのだが、俺の驚く顔が見たいがために口から出したらしい。しかも中級魔法。

中級魔法なのに無詠唱で、しかも口から出すってどんだけだよ！
つてか補助魔法と全然関係ねーだろ！など突っ込みたいところは多々あったが、それはアデーレばあさんはチートで変人だということ
で何とか自分を納得させた。

その後、アデーレばあさんから『ダスト』の感覚やら詠唱の仕方やらを習い、3年が経つころには予定の4分の3の魔法を習得することができた。

修行は戦闘をしているばあさんに補助魔法をかけること、自分の肉体に強化魔法をかけて戦うことなど、攻撃的要素がないため、ずいぶんと特殊なものとなった。

ただ、3年でこれだけの魔法を習得できることは異例だったらしく、アデーレばあさんに「将来が楽しみじゃわい」といわれ、ゾツとした。

アデーレばあさんに褒められるなんて……、俺は頑張って人間のま

までいよう！ と心に誓った。

さらに2年がたち、現在俺は小屋周辺に生息する魔物であればソコで狩れるようになっていた。もちろん予定の補助魔法はすべて習得したし、余裕があったのでいくつかの便利な魔法まで覚えた。

それにただ魔法を覚えただけではなく、ダストを体内に取り込める量を増やすために基礎体力作りも並行して行ったため、自分の実力にも自信がついてきた。

しかしなぜだか体は華奢のまま、筋肉は付いているのだが引き締まりすぎてよくわからないし、顔も弱弱しい女の子のような容姿であった。(やはり両親似らしい)

別にワイルドなマツチヨになりたかったわけではないのだが、これではなめられてしまうのではと心配になってきた今日この頃。

というわけで現在に至る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8130y/>

なんか転生した

2011年11月24日01時53分発行